

# 不倒の油画道

FROM THE 151st YEAR:  
KANOKOGI TAKESHIRO RETROSPECTIVE  
RETURN TO REALISM

生誕151年からの

カノコギタケシロウ

鹿子木孟郎



泉屋  
博古館  
SEN-OKU  
HAKUKOKAN  
MUSEUM

2025.9.27 sat.—12.14 sun.

KANOKOGI  
TAKESHIRO

《美人像》(部分) 鹿子木

このたび、泉屋博古館（京都本館）では、特別展「生誕 151 年からの鹿子木孟郎 一不倒の油画道一」を開催いたします。

本展覧会は、近代の日本洋画に本格的な写実表現を移植した鹿子木孟郎（かのこぎ・たけしろう）の生誕 150 年を記念して開催するものです。鹿子木は現在の岡山市に生まれ、はじめ天彩学舎や不同舎で洋画の基礎を学び、のちにフランスへ留学しました。パリでは 19 世紀フランス・アカデミズムの正統に属し、歴史画の名手として知られたジャン＝ポール・ローランスの薫陶を受け、生涯を通じてフランス古典派絵画の写実表現を追究しました。帰国後は、関西美術院や太平洋画会、文部省美術展覧会の中心的な画家として活躍し、近代日本洋画の発展に確かな足跡を残しています。一方で鹿子木は、留学の支援を受けた住友家 15 代当主・住友春翠に、師ローランスの代表作のほか自作や模写、その他西洋名画を仲介しておさめるなど、住友家と深い交流を結んでいることも見逃せません。

本展は初期の天彩学舎や不同舎で学んだ素描から、渡仏しフランス古典派の巨匠ローランスに学んだ渡欧作、帰国後の関西美術院や下鴨家塾での活動などを作品により網羅し、生涯の画業を紹介しつつその功績を再考します。とくに師ローランスの写実技法の伝播について再検討を行い、近代日本洋画における写実表現の展開をめぐる問題を検証します。

## 鹿子木 孟郎 KANOKOGI Takeshiro

鹿子木孟郎（1874—1941）は、現在の岡山市に池田藩士の宇治長守の三男として生まれる。14 歳で洋画家・松原三五郎の天彩学舎に入学、18 歳で上京し、小山正太郎の画塾・不同舎に学ぶ。1900 年（明治 33）に渡米、翌年にはイギリス経由でフランスに渡る。留学中に住友家の援助を受けてアカデミー・ジュリアンで「最後の歴史画家」と称されたジャン＝ポール・ローランスに師事。1904 年に帰国した後は、鹿子木家塾の創設や京都高等工芸学校講師を務めるなど、以後多くの後進を育てた。また 1905 年には浅井忠らと関西美術院を創立し、1908 年に第三代院長となった。その後も文部省美術展覧会の審査委員を務めるなど、京都洋画壇の中心的な作家として活躍した。



### 1 約四半世紀ぶりの大規模回顧展を開催、鹿子木孟郎の画業の紹介と再考

鹿子木孟郎はフランス・アカデミズムで学んだ正統的なリアリズムを日本へと伝え、その重厚かつ堅牢な油彩画が高い評価を受けた近代日本洋画の巨匠です。回顧展はこれまで2回開かれていますが、2001年に府中市美術館で開かれた展覧会以降、鹿子木の質の高い作品に触れる機会は限られてきました。本展は、約四半世紀ぶりの本格的な回顧展であり、鹿子木が活躍した京都の地で開催されるものです。

文部省美術展覧会や太平洋画会の展覧会出品作をはじめ、師ジャン＝ポール・ローランスの作品、あるいは今回の調査で発見された新出作品を含む、約80点から鹿子木の画業を紹介し、彼が目指した表現について再評価することを目指します。

### 2 近代日本洋画における「写実」の意味

弟子の黒田重太郎が回想するように、鹿子木は「正確に物を観、それを再現すること」を最も大切にしていました。確かに鹿子木の作品には、長い時間をかけて対象と向き合い、それを正確に写し取る姿勢が通底しています。一方で鹿子木作品の魅力は、単に物のかたちを正確に捉えるだけではない、本質に迫る「写実」のあり方を示しています。

印象派以前のリアリズムを根幹とする鹿子木の絵画表現は、日本近代洋画の主流となった黒田清輝たちの外光派の表現とは一線を画します。写実表現が見直される昨今の美術界において、鹿子木の作品は一周回って新鮮な驚きと絵画の豊かさに気が付かされます。

本展では多数の不同舎時代の風景スケッチや渡欧期の裸体人物写生など、鹿子木における写実表現の形成と展開をご覧ください。

### 3 パトロン・住友

1900年（明治33）に、父を亡くした鹿子木は、不同舎の学友とともに欧米遊学へ出発しました。パリで出会った浅井忠から長期滞在を勧められた鹿子木は、住友家に支援を願い出て、2年間留学延長できる奨学金を受けています。その代わりに鹿子木は、師のジャン＝ポール・ローランスを含む西洋絵画の実作を住友家にもたらし、さらにはアングルやコローといった名画の模写も収めています。その後も住友家の後援により、1906年（明治39）と1915年（大正5）の2回にわたり渡仏し、当地で本格的な絵画学習を果たしました。

本展では、近代における洋画家支援の様相、また画家とパトロンの親しい交流を紹介します。

## 第1章「不倒」の洋画家への旅が始まった。

1874（明治7）年、岡山の旧池田藩士の家に生まれた鹿子木孟郎は、14歳で松原三五郎の天彩学舎に入門し洋画を学び始めました。上京後は、小山正太郎の不同舎で「一本の線」による素描を重点的に修練し、空気や光の移ろいまで描き出す写実表現の基礎を築きます。文部省教員検定試験に首席合格後、各地の中学や師範学校で美術教師を務めながら、明治美術会展に出品し画家としても注目されました。本章では、少年期の繊細な水彩、不同舎時代の風景素描、初期油彩画に見る観察力と描写力の高さを紹介します。「不倒」と号した鹿子木の、倦まずたゆまぬ写実探究の歩みがここに始まります。

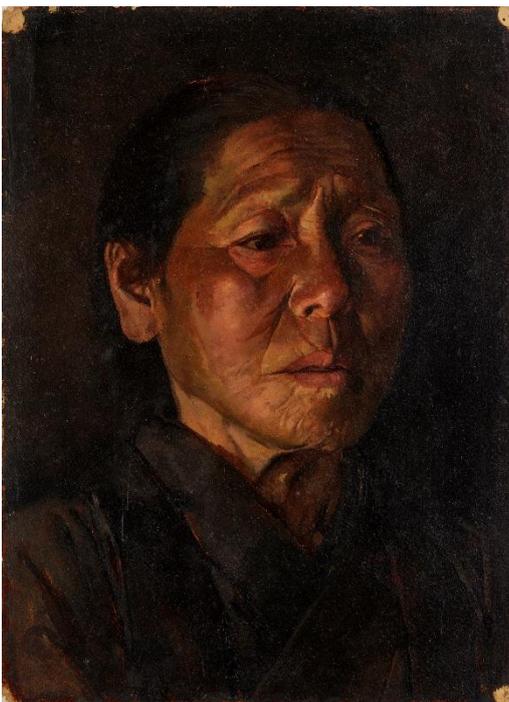


鹿子木孟郎《社殿》

水彩・紙

個人蔵

おそらく根津権現の社殿を作品で、水彩ならではの透明感と鮮やかな色彩で細やかに描写されている。鹿子木の建築描写における構成力と色彩感覚が際立つ作品。



鹿子木孟郎《老女》

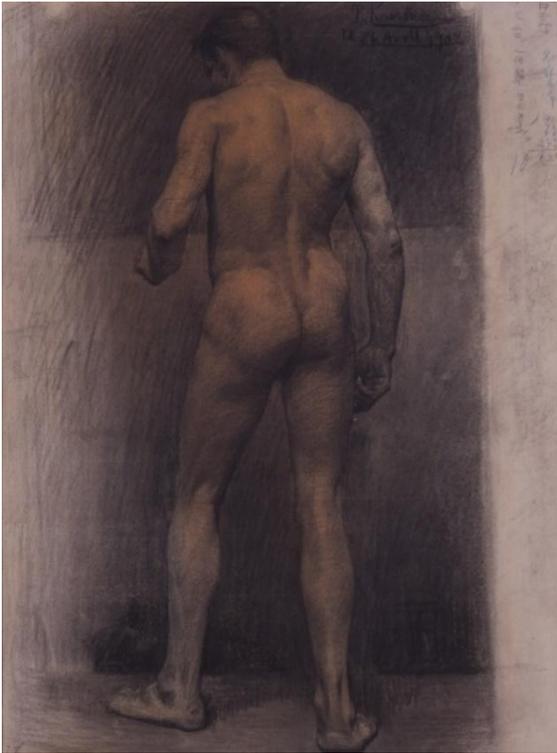
1894（明治27）年 油彩・紙

個人蔵

四分の三正面観で描かれた老女の顔には、しわが深く刻まれ、長い人生の重みを物語っている。老いの尊厳と精神性を、西洋の油彩技法を通じて描き出そうとした鹿子木のまなざしが、画面全体に静かな迫力を与えている。

## 第2章 タケシロウ、太平洋を渡ってパリまで行く。

1900年、鹿子木孟郎は仲間と共に渡米し、水彩・素描展を開催。その作品売却で得たお金を元にヨーロッパへ渡り、浅井忠の勧めによりパリへ留学。アカデミー・ジュリアンで「最後の歴史画家」と称されたジャン＝ポール・ローランスに師事し、西洋絵画の基礎である人体デッサンや油彩表現に励みました。さらにルーヴル美術館で古典名画の模写を重ねることで、鹿子木の人物画研究は深みと多様性を増し、それは《白衣の婦人》などの滞欧作に結実しています。帰国後は京都で画塾を開き、教育と創作の両面で洋画界に貢献しました。

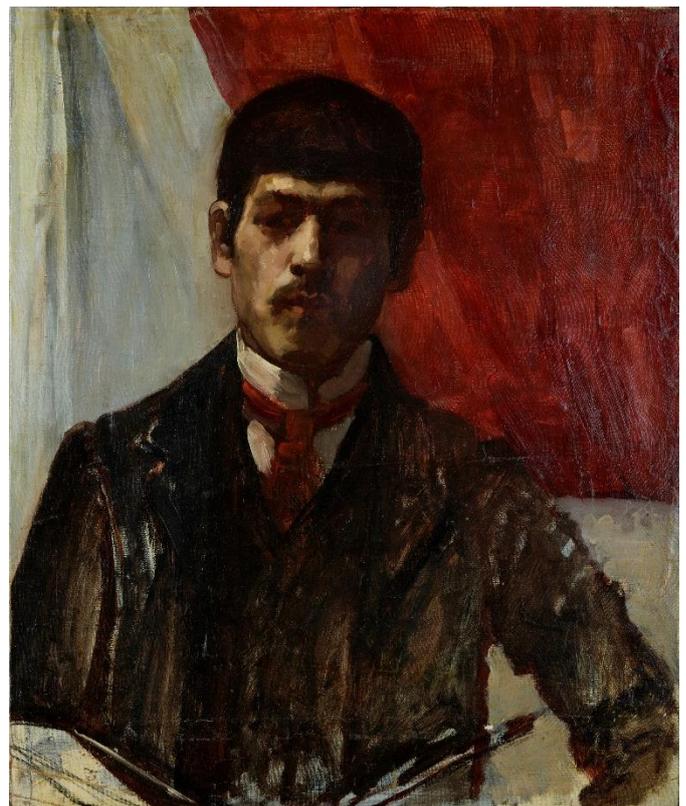


鹿子木孟郎《男裸体習作（背面）》

1902年（明治35）、木炭・紙

岡山県立美術館

第1回目の渡欧中に描かれた男性の裸体スケッチ。アカデミー・ジュリアンでジャン＝ポール・ローランスに師事した鹿子木は、解剖学を学ぶことで、骨格や肉体を正しく理解して描いていることがうかがえる。



鹿子木孟郎《自画像》

1903（明治36）年頃、油彩・キャンバス

個人蔵

光と影の対比的な表現と粗放な油彩の塗りが、像主である作者・鹿子木孟郎の内面の強い感情を表した表現主義的自画像ともいうべき作品であろう。ニュアンスのある灰色と濃い赤で塗り分けられた背後の空間が、作者の自信を含んだドラマティックな心的変化を思わせる。

## 特集 鹿子木の師ローランス

鹿子木孟郎がフランス留学中に師事したジャン=ポール・ローランスは、19世紀後期のアカデミー画家。光と闇の対比によるドラマティックな空間のなかに歴史人物を写実的に描き出し、主題や感情の動きを捉えた作風で知られました。アカデミー・ジュリアンでの直接指導のもと、鹿子木はローランスの精緻な描写力を学び取り、自身の作品へと昇華させていきます。本展では、鹿子木が仲介して住友に届けたローランスの代表作から、鹿子木渡仏時代に描かれた作品などを紹介します。



ジャン=ポール・ローランス  
《マルソー将軍の遺体の前の  
オーストリアの参謀たち》  
1877年、油彩・キャンバス  
泉屋博古館東京

フランス革命で輝かしい武勲を立て若くして将軍となったマルソーの死を題材とした作品。1877年のサロンでこの絵は栄誉賞牌を受賞し、その後1900年のパリ万博でも展示され、ローランスの画業においても最も称賛された作品のひとつとなった。鹿子木は、2度目のフランス留学中の1906（明治39）年にこの絵を住友春翠に仲介し、1908（明治41）年には住友家の応接間に掲げられていた。

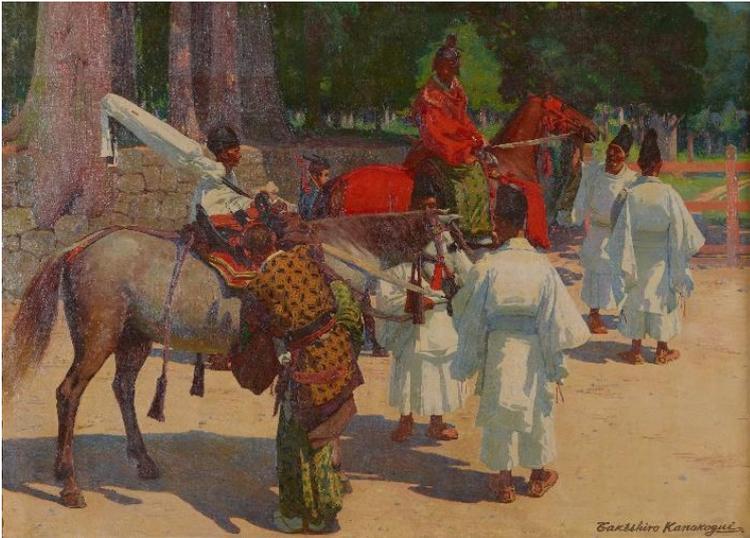


ジャン=ポール・ローランス《年代記》  
1906年、油彩・キャンバス  
泉屋博古館東京

人物の衣装や室内の設えから、中世の物語と類推できる。出典は、ローランスが挿絵を手掛けたオーギュスタン・テイエリ著『メロヴィング王朝史話』（1881-87年刊）にまつわるものだろうか。鹿子木孟郎の取次によって住友家に届けられ、須磨別邸の客室に飾られていた。

### 第3章 再び三度のヨーロッパ。写実のその先へ

1906年、鹿子木孟郎は斎藤与里、伊庭慎吉とともに2度目のフランス留学に赴き、アカデミー・ジュリアンで油彩裸体画の研究に没頭。サロン入選や同校の最高賞受賞を果たし、大きく飛躍しました。帰国後は関西美術院長などを務めつつ、派閥争いを離れ自らの画塾を設立。1915年には3度目の留学で象徴主義の風景画家ルネ・メナールと出会い、写実にとどまらない観念的表現への展開を模索します。3度の渡欧は、古典への憧憬とリアリズムの確信を深めるとともに、画家としての核を形成する重要な転機となりました。



鹿子木孟郎《加茂の競馬》

1913年（大正2）油彩・キャンバス

株式会社三井住友銀行（泉屋博古館東京寄託）

「競馬(くらべうま)」は、2騎1組で速さを競う京都・上賀茂神社の5月の神事。初夏の強い日射しのもと、伝統装束の鮮麗な色彩が浮かび、優美な中に高揚する空気感を重厚な写実表現によって描いた鹿子木帰国後の代表作。



鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》

1907年（明治40）、油彩・キャンバス

泉屋博古館東京寄託

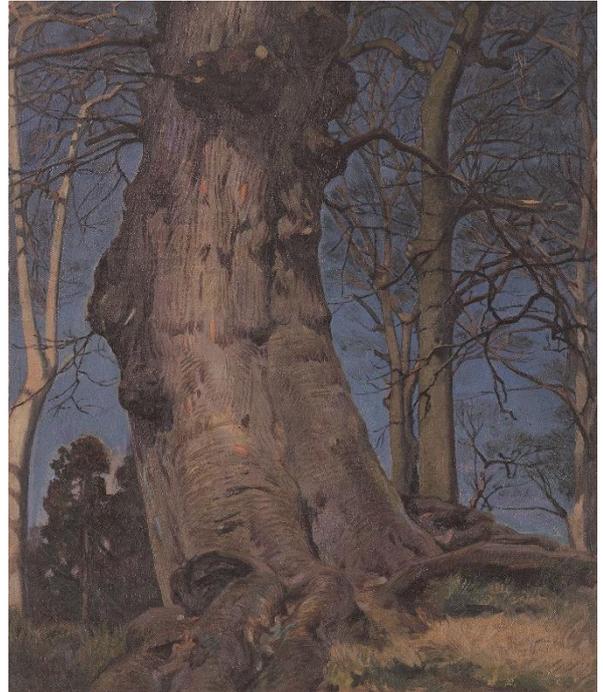
本作は、ノルマンディー地方イポールの浜での取材をもとに、フランス・アカデミズムの正統な写実表現によって描ききった滞欧作。浜辺の小石に最後まで苦しんだという。1908年春のフランス芸術家協会のサロン入選作

## 第4章 象徴主義の光を受けて — 不倒の画家、構想の成熟。

鹿子木孟郎は三度にわたるフランス留学を通じ、リアリズムを基盤に精神性と象徴性を併せ持つ独自の表現を追求しました。特に第三次留学で出会った象徴主義の風景画家ルネ・メナールの影響により、自然の背後に潜む観念的な世界へのまなざしが強まります。帰国後は寓意的な人物画や、象徴主義的な歴史画にも取り組み、写実に裏打ちされた精神的表現を深化させました。雅号「不倒」に象徴されているように、晩年に至るまで、流行や権威に迎合することはなく、写実という厳格な軸のもとに、感情の表出を抑制しながら精神性と象徴性を高い次元で融合した作風を展開しました。

鹿子木孟郎《木の幹》  
油彩・キャンバス  
個人蔵

地面近くから見上げるような視点で捉えられた一本の巨大な落葉樹の幹が、圧倒的な存在感をもって描かれている。細部にわたる描写からは、自然を深く観察しその本質に迫ろうとする鹿子木のまなざしが感じられる。



鹿子木孟郎《画家の妻》  
1921（大正10）年、油彩・キャンバス  
個人蔵

ソファに腰掛けた裸体の女性像が描かれ、静かな思索の気配が漂う。しなやかな身体の線には、西洋古典絵画に通じる美意識が感じられ、背後のタピスリーや画面左手の布が、装飾性と色彩のバランスを整えている。日本的な主題と西洋的な技法が融合した本作は、鹿子木の裸体表現における成熟を示す作品である。

- ◆ 記念講演会「鹿子木孟郎の人と芸術」  
10月11日(土) 14時-15時30分  
講 師：梶岡秀一氏 (京都国立近代美術館学芸課長)
  
- ◆ シンポジウム「鹿子木研究のこれから」  
10月25日(土) 14時-17時  
基調講演：児島薫氏 (実践女子大学教授)  
パネリスト：橋村直樹氏 (岡山県立美術館学芸課長)  
一柳由樹氏 (神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程、  
神戸市立小磯記念美術館学芸員補助)  
野地耕一郎 (泉屋博古館東京館長)  
ゲスト：川村悦子氏 (画家)  
モデレーター：椎野晃史 (泉屋博古館東京主任学芸員)
  
- ◆ 泉屋博古館×関西美術院「クロッキーに挑戦」  
11月16日(日) 14時-15時30分  
講 師：阪脇郁子氏 (関西美術院理事長)
  
- ◆ スライドトーク (予約不要/当館受付にて整理券配布) いずれも14時-15時
  - ① 10月12日(日) 椎野晃史 (泉屋博古館東京主任学芸員)
  - ② 11月3日(月・祝) 野地耕一郎 (泉屋博古館東京館長)

## 基本情報

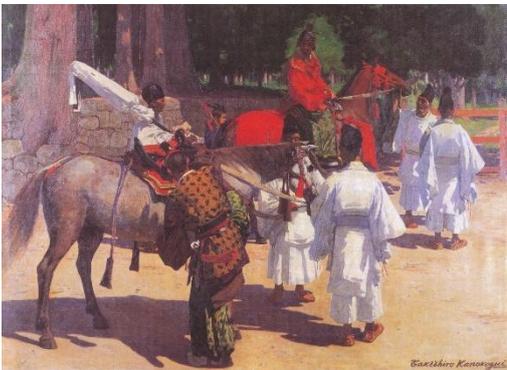
- 【展覧会名】 特別展 生誕151年からの鹿子木孟郎 一不倒の油画道一
- 【会 期】 2025年9月27日(土)～12月14日(日)  
前期：9月27日(土)～11月3日(月・祝) 後期：11月5日(水)～12月14日(日)  
併催 ブロンズギャラリー「中国青銅器の時代」
- 【会 場】 泉屋博古館 〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24  
TEL 075-771-641 HP [https://sen-oku.or.jp/program/20250927\\_kanokogitakeshirou/](https://sen-oku.or.jp/program/20250927_kanokogitakeshirou/)  
\*\* 2026年1月17日～4月5日 泉屋博古館東京へ巡回 \*\*
- 【休 館 日】 月曜日、10月14日、11月4日・25日 (10月13日、11月3日・24日は開館)
- 【開館時間】 10時-17時 (入館は16時30分まで)
- 【入 館 料】 一般 1,200円 (1,000円) 学生 800円 (700円) 18歳以下無料  
※学生ならびに18歳以下のかたは証明書のご呈示が必要です  
※20名以上は( )内の団体割引  
※障がい者手帳等ご呈示のかたはご本人および同伴者一名まで無料
- 【主 催】 公益財団法人 泉屋博古館、日本経済新聞社、京都新聞
- 【特別協力】 府中市美術館
- 【後 援】 京都市、京都市教育委員会、京博連、公益社団法人京都市観光協会、NHK 京都放送局
- 【交通アクセス】 京都市バス：JR・新幹線・近鉄電車「京都駅」/京阪電車「三条駅」から5系統  
阪急電車「烏丸駅」から32、203系統  
地下鉄烏丸線「丸太町駅」から93、204系統  
5、93、203、204系統：「東天王町」下車、東へ徒歩200メートル  
32系統：「宮ノ前町」下車すぐ  
地下鉄：東西線「蹴上駅」から徒歩約20分
- 【問合せ先】 泉屋博古館 (京都・本館) 広報担当 坂井さおり pr-kyoto@sen-oku.or.jp  
TEL 075-771-641 FAX 075-771-6099

特別展 生誕 151 年からの鹿子木孟郎 —不倒の油画道—

広報用画像一覧 会場：泉屋博古館（京都・本館）



鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》  
1907 年（明治 40）泉屋博古館東京寄託



鹿子木孟郎《加茂の競馬》  
1913 年（大正 2）  
株式会社三井住友銀行（泉屋博古館東京寄託）



鹿子木孟郎《婦人像》個人



ジャン＝ポール・ローランス《マルソー将軍の遺体の  
前のオーストリアの参謀たち》  
1877 年 泉屋博古館東京



ジャン＝ポール・ローランス《イレヌ》  
1896 年 府中市美術館



鹿子木孟郎《厨女図模写（原画ジョセフ・バイユ）》  
1901-03 年頃（明治 34-36）泉屋博古館東京



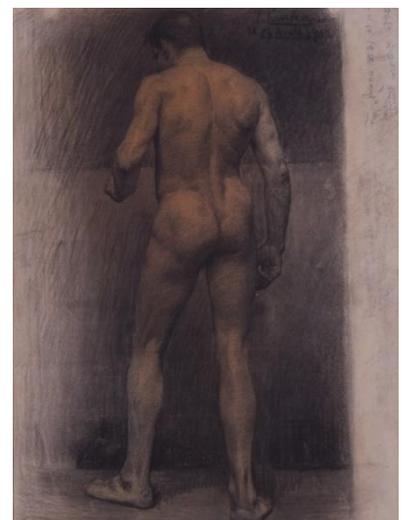
鹿子木孟郎《浴女》  
1934 年（昭和 9）岡山県立美術館



鹿子木孟郎《白衣の婦人》  
1901-03 年頃（明治 34-36）  
京都工芸繊維大学 美術工芸資料館



鹿子木孟郎《ショールをまとう女》  
1906-07 年（明治 39-40）府中市美術館



鹿子木孟郎《男裸体習作(背面)》  
1902 年（明治 35）岡山県立美術館